



平成24年4月1日
 柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所：川崎市麻生区上麻生6-40-1柿生中学校内
 電話：044-988-0004 (柿生中学校)
 第47号

王禅寺で見かけた不思議な 「まじない符」その真相は？

昭和初期の
故郷の姿

—— 柳田国男が王禅寺で見た「コノ手の子ハルス」の貼紙 ——

以前にも本誌で掲載しましたが、柳田国男の著「水曜手帳」に、王禅寺村に入る橋の左たもとの新しい2階建ての農家の軒先に貼られていた『コノ手の子ドモハルス』『コノ手ノ子ドモルス』という2枚の貼り紙について、著者は、当時流行していたジフテリア（法定伝染病のひとつで小児がかりやすい細菌性の病）が我が子に感染することを恐れて呪い（まじない）として貼ったのではないかと指摘されています。

当時は子供が罹る伝染性の病気が、ジフテリアをはじめインフルエンザ・百日咳・疫痢（えきり）（えきり）（赤痢）など生命を奪う可能性のある流行性の伝染病が多く存在していました。

この貼り紙は、どうもジフテリアに限らず他の流行性の伝染病全体に関してとも考えられます。柳田国男がこの情景を見たのが何月頃かにも関係してくるのですが、もしも11月～2月頃だとしたなら柿生・岡上に伝わる一つ目の「メカリバアサン」伝説に関わりのあるものだと思います。

「メカリバアサン」は12月8日に現れ各家々を廻り、玄関が空いていたり荒れているとその家の子供の名前を帳面に書きとめ、一旦村々の道祖神に帳面を預け、2月8日に再びこの帳面を取り戻ってくるわけです。帳面に名前を書かれてしまった子供たちはやがて伝染病に罹り命を奪われてしまうことになり



ます。親にとつたらとんでもない妖怪であるわけです。したがってこの“紙”は「メカリバアサン」に対するメッセージであるとも考えられ、「この紙の子形の子供は今は留守なので私の家に入り込んで名前を書いていっても意味がないですよ」というようなことなのでしょう。親の切なる思いが伝わってきます。

実はこの話によく似た話が他にもあります。日本では明治23年から24年にかけて初めて「インフルエンザ」という名称で感冒が大流行しました。この時の風邪は「お染め感冒（おそめかぜ）」という名が付けられ、各家の出入り口には『久松留守』と書かれた紙が貼られていました。（次ページに続く）

○お染め感冒の因縁 目下市中に流行するインフルエンザは、大抵は入り込みしよりお染め感冒と云ふ説もあり又「久松留守」紙（大嘗して家々出入り口へ張り出し）るの所病の来るを避くる元香るべけれど、病に罹らざることと其原因とを尋ねるに、あふ汗をかいて苦しむも（曲屋といふ家屋に因みて）お染め感冒の名で用しふるものありと或人の口又聞られり

(前ページより続く) まずは「お染め、久松」の話から説明しないと話は進みませんので少し説明いたします。『江戸時代中頃、大阪の油屋の娘“お染”と奉公人の“久松”が、すでに“お染”には“いいなずけ”（幼少の時から親の合意で結婚することが決まっている男女のこと）が決まっているにもかかわらず、お互いに好き同士になってしまい、周囲の反対もあって、とうとう二人で命を断ってしまう』という話です。

前ページの新聞資料にも少し書かれていますが、お染の「染」と伝染病の「染」を結びつけ、お染をインフルエンザに見立て、自分の家にインフルエンザがやってこないように、「お染の好きだった『久松』は留守だからあなたがいらしても意味がありませんよ、来ないでください。」というわけです。

全く意味のないような話ですが江戸時代からたびたび流行性の風邪(かぜ)には「お染風邪」という名称が付けられ「久松留守」の札が貼られました。ちなみに「お染風邪」の名称は明治23~24年が最後でした。

また、江戸時代には同じような札を玄関付近に張り出したことがわかっています。例えば、「鎮西八郎為朝公御宿」と書かれた札が貼られることもあり、「この家は武勇で鳴らした鎮西八郎為朝(平安時代武勇で鳴らした鎮西源朝)が宿泊している宿です」と書いて疫病神を恐がらせ退散させようという。丁度「メカリバアサン」を追い払うときの「目籠(めかこ)運動会(タマ入れ)のカゴ(ようなもの)」を玄関先に掲げることと同じです。また「カナイー統ルス」というまじない札もあり「家族全員留守です」という単純なものもありました。



一方、流行した風邪に対してつけられた風邪の愛称?もいくつかあります。例えば、安永年間(1772~1781年)に流行った『お駒風(おこまかぜ)』は白木屋お駒の浄瑠璃(じょうるり)訃(しよ)がヒットした頃

(大正7年の朝日新聞に掲載された「まじない札」の写真)

でこの名前が付けられました。以後『お世話風』は『おおきにお世話お茶でも召し上がれ』という語が流行したことから。『谷風』は天明年間に天下無双の相撲力士の谷風が死亡する原因となった風邪であることから命名されていました。

いずれにしてもかつてはインフルエンザなどを始めとする伝染病は人間の生命に関わる大変問題のある病気でした。今日のように病原菌が原因であるということもよくわからない時代ですから、何か目に見えない恐ろしい存在が想定されてくるわけです。

「メカリバアサン」の場合は、「恐ろしい存在」がある程度明確です。「久松留守」などは一時の流行的なもので、一種ダジャレ的なものです。しかし、その背景には日本人が古来からもっていた素朴で原初的な信仰の姿が見え隠れしているようではありません。王禅寺の「コノ手ノ子ハルス」のまじないは、一種の结界(聖と俗との境界)を造り魔物の侵入を防ぐという意味をもっているはず。「久松留守」も同様の意味をもっていたはずではないかと感じます。門口に札を貼るという習慣はもっと古い時代から日本にあったものと思われます。

流行性感冒速治薬

製薬所 小川薬房 東京市日本橋区三丁目六番地

小山儀右衛門製



解熱薬

定 二包入 金五銭

七包入 金十五銭

十五包入金三十銭

(明治24年2月3日「東京朝日新聞」かぜ薬広告)

(明治24年2月3日「東京朝日新聞」かぜ薬広告)

(参考資料:「江馬勝著作集」「幕末明治流行事典」「水曜手帳」「鯛太夫四季」「折口信夫全集」)

郷土の歳時記

4月 (卯月ニウツキニ「植え月、の略で種籾を植える月のこと)

◎花祭り(灌仏会ニかんぶつえ)

お釈迦様(正式の名前:ジョーダマシッダールタ)は今から約2500年前、現在のネパールのヒマヤラ山脈のふもとのカピラ城でシャカ族の王子として生まれました。

お釈迦様の生誕の時、甘露水(甘い水で不死の靈薬であったといわれています)が降り注いだといわれ、降誕会(ニうたんえニ誕生会)の時にお釈迦さまの像に甘茶をかけるのは、その逸話からきたことです。日本で甘茶がかけられるようになったのは江戸時代のことで、

- ・「花祭り」という名称は、明治時代後期に付けられたようで、もともと民間で行なわれていた4月7～8日の上弦の月が出る頃、山に登って花を摘み、それを長い竹のさおの先に付けて庭に立てて、山の神さまを迎え入れる行事とが合体して出来上がったものではないかと言われています。



(東大寺の誕生仏)

- ・「灌仏会(かんぶつえ)」というのは、お釈迦さまの像に甘露の水をそそぐという意味ですから、現在この日に行なわれる仏像に甘茶をかける行事からきている言葉です。
- ・柿生・岡上のお寺でも4月8日に行なわれ、各お寺では高さ50～60センチ程の高さの仮のお堂を立て、それに季節の花(椿が主)で美しく屋根を葺きます。お堂の中には水盤を置き、その中央に右手の人差し指で天を指し、左手の人差し指で地を指した仏像を置きます。この仏像の姿は、釈迦が誕生した時、「天上天下 唯我独尊(てんじょうてんが ゆいがどくそんニ広い天地の世界で自分より尊いものはいない)」と言われたという話からつくられたものです。

当日、参拝者はこのお釈迦さまの頭から小さなひしゃくで甘茶を注ぎます。

◎昭和の日(4月29日)

- ・この日は、もともと昭和天皇の誕生日でしたが昭和64年1月7日崩御され、以後は「みどりの日」という名称で残されました。その後、「昭和の日」をめざす運動がおこり、平成17年に国会で祝日に関する法律の改正が決まり、平成19年4月29日より「昭和の日」として施行されました。一方、「みどりの日」は5月4日に移動することになりました。同法の趣旨は「激動の日を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いをいたす」と明記されています。昭和の時代を振り返り、平和で豊かな国作りを思い起す日でありたいものです。

郷土史関係図書紹介

「オオカミの護符」

小倉美恵子 著 (宮前区土橋居住)
新潮社発行 定価1500円

各家の門口に貼られているオオカミのお札の謎を解き祖先の思いを探る

4月21日(土) 第33回 柿生カルチャーセミナー講師で講演予定



大好評「昔の遊び」！ 昔と今の子供大集合！

2月25日(土)に「思い出のふるさと～子供の郷～」と題して第32回のカルチャーセミナーが開催されました。

約40数名の昔の子供と現在の子供が集い、前半は昔の遊びについてパネルディスカッションを、後半は遊び道具の作製と遊びの実演が行なわれました。竹馬・メンコ・クギたて・竹とんぼ・おてだま・ゴム飛び・鳥笛・竹鉄砲など時間があっという間に過ぎてしまう楽しいひと時でした。



柿生郷土史料館開館のご案内

開館時間

開館：午前10時
閉館：午後3時

開・偶数月は土曜日
閉・奇数月は日曜日

4月21日(土) (カルチャーセミナー14:00)

4月28日(土)

※4月21日(土)は午後1時30分よりカルチャーセミナー開催されますので特別見学会は午前中のみとなります。

5月6日(日)

5月13日(日)

5月20日(日)

5月27日(日) (カルチャーセミナー)

※27日(日)は午後1時30分よりセミナー開催

柿生郷土史料館の4・5月の催物

(特別企画展)

※ 問い合わせ 988-0004 (社特機)

第5回 特別企画展

「写真でたどる柿生・岡上
百年の歩み展」

(期間) 4月(21日より)～7月(22日まで)

(各種セミナー)

第34回 カルチャーセミナー

テーマ 「オオカミの護符」 現在、書店で人気沸騰中！著者◎が語る川崎北部の祖先の軌跡

◎講師 小倉美恵子氏 (宮前区土橋在住・文化庁映画賞受賞)

◎期日 4月21日(土) 午後1時30分より

◎会場 柿生郷土史料館

◎内容 「オオカミの護符」の謎を解き、祖先の思いを語る。



第35回 カルチャーセミナー

テーマ 「中世の柿生・岡上～南北朝・室町時代～」

◎講師 中西望介氏 (戦国史研究会員、元川崎市文化財調査員)

◎期日 5月27日(日) 午後1時30分より

◎会場 柿生郷土史料館

◎内容 南北朝・室町時代の柿生・岡上の姿を古文書や考古資料から探る。